思い出の定着

椎名未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思い出の定着

【Ｎコード】
Ｎ１８２５Ｖ

【作者名】
椎名未来

【あらすじ】
２００５年　仙台、医大生の邦彦は姉の墓参りに付き合っていた。ある日不思議な夢を見た邦彦は、それについて過去を追っていく。姉のトラウマ、友人の葉山、識、飛鳥、早川、鈴鳴が織り成す青春コメディ。

メロンパンが好きだった話一

実際には見ていない。けど。そういった場面をみたことがないわけじゃない。例えばドラマ、とか、映画、とか。リアルにそういうものにあったことがない。「死」というものはそういうもんなだろうなぁと私は思う。

現に私の家族は健在で、今、したの墓地の入り口で暇そうにしている私の弟だってうるさく、うざったく、昨日だって間違って脱衣所をあけられ顔面に蹴りをいれてやってもぜんぜん平気なくらい元気だ。

だから想像するしかない。想像。例えば、彼が急いでいたとして。霧がかかっていて、路面がアイスバーンで。大学が冬休みで。早朝で。彼が何も来ないだろうと渡った道路の向こうから。

そこであわせた手をすっと下に下げ、目の前の墓石を見た。なんだかやすっぽい饅頭が置かれ、さらに安っぽい線香煙をだしてその煙が風に揺られて左の丘の下へとたなびいていく。人間死んでしまうとこんなもんなんだろうな、と思う。けど、信じられない。やはりその場にいなければリアルと言うものはないのだろうと思う。今でもケータイに電話すれば、ビデオもってこいだの、衣装がないだの意気のいい声が聞こえてきそう。こんな考えも所詮は他人だからだろうか。

「先輩……」

目の前の葉山家ノ墓という文字に向かって呟く。

「あー……」

上を見ればまさに俺を干からびせようと魂胆が見え見えの太陽がギラギラを輝き、その所々には雲があるけどうまい具合に太陽を遮

ってくれない。雲も暑いから太陽を避けてるとしかおもえてないらない。
「あー……、あぢー……」
当然のことを言ってみた。でも当然事というのは当然のことであるからいっても意味がなく、それを思い知らされるのでイライラが溜まり横の希未ねーちゃんの車にけりをいれたくなるわけだこれが。
現状。場所は田舎の墓地。俺はねーちゃんの車の横でヤンキーよろしく、すっかりさめた生ぬるいスポーツドリンクをゆらゆらと手の中で揺らしながら早くししろー、早くしろー、とお墓参りのいってるねーっちゃんに念力を送っているわけだ。
本当に都合よく俺の第六感が冴え、念力が伝わったらびっくりするだろうなぁ。
……びっくりするだけで帰ってくるとは思えないな……。
「あー……飛行機のりてぇー」
上を田舎に特有のジャンボジェットがゴーっとドップラー効果を残しながら俺の頭上を横切っていく。
その後に残る飛行機雲。
そういえば、飛行機雲っつーのは燃料のガソリンを抜いた状態で出る雲で、緊急時にしかださないとか聞いたことがある。しかし、あの飛行機やらよく見る飛行機やらは全部出してる。なぜだろう。あとでねーちゃんに聞くかな。
暇だし、暑いし。暑いし！！
「へーい！　ボーイ！」
「あ？」
車の反対側から聞きなれた声がした。それに応じて振り向くとなんともまぁ、上はチューブトップにワンピースに下はタイトな八部丈のダメージジーンズという田舎には絶対いなさそうな、さらに絶対田舎にいなさそうな美人の容姿に短い髪を薄いブラウンに少しレイヤーのかかった髪形をした女性と呼称される生命体その一が立っていた。

俺はその女性その一から視線を外し、少ししゃがむことにした。
「あー！　ちょっと人が折角、声かけてあげてるんだからなんか返事しなさい！」
　そんなの頼んだ覚えは激烈にないし、今の俺はコイツの相手が出来るほど気力体力魔法力精神力神通力全てゼロなので遠まわしに遠慮しておきたい。でもコイツがほっといてくれるはずもなく、車を回り込むと俺の横に並ぶようにしゃがんできた。
ヤンキー二人の出来上がり……。
「いい加減おこるよー」
「……あーはいはい。そんで何のようでここに？」
　チョップを食らった。脳天に。あんまり痛くない。
「お墓参りですー」
「あーそうでしたね。葉山さん」
「それ嫌味？　名前で呼んでよ」
「しおりん」
　グーのパンチを食らった。顔面に。ちょっと痛い。
「栞さん……」
「ばっちぐー！」
　ばばくせぇ……。
「希未さんはまだ上？」
　栞は自分の髪をとかしながら聞いてくる。
栞のほうが風上なので香水やらシャンプーやらのいい匂いが風に伝わってきて、こいつは俺をほれさせるためにそこに位置してるんじゃないかと言う疑問が出て来る。
「まーだー。例によって上に上って」
　チラッと時計を見る。
「一時間十一分二十二秒です。コレは最高記録に近づいていますねぇ」

「あっきれた……」
　栞があきれたのは時間を計ってる俺にか、そんな弟を夏真っ盛りの青空の下、車の横で一時間以上待たせて脱水症状での完全犯罪を目論むねーちゃんにあきれたのかどっちかわからない。
「邦彦はいいの？　こんなとこいてさぁー。時間とかはかっているほど暇なら一緒に行けばいいのに」
　どうやら呆れた論点は別のとこにあったみたいだ。俺は少し目を細め、視線を丘に移す。
「ねーちゃんは断らねぇかもしないけどさー、俺がいちゃなんかまずいだろ？　いや、まずかぁねんだけどさぁ。まぁ一人のほうがいいだろ。わかるだろがしおりん」
　そういって栞のでこに一発でこぴんをかます。って、とにやにやしながら俺のでこぴんを食らう。ああ、嫌だ嫌だ。どっちが嫌な性格だってんだろう。
「にゃー、くにくにもいいとこあるにゃー」
「なにがだよ……」
「ああーん！　愛するお姉さまのために！　俺はみちを譲って、うっ！」
　栞の台詞途中でチョークスリーパーを決めた、落とすか？　マジで落とそうかこのアマ。
栞の髪の匂いにちょっとむずむず鼻をさせながら少し力を強めると、ギブギブとぺしぺし腕をたたいてきた。
開放。
「ばー！　ちょ！ばーっかじゃないの！　おにあくまへんたいちきん！」
　ちきん……？
「バカはお前だ」
　一応突っ込んどいた。
「ところで、お前の両親は？」
「は？」

「いや、だからおばさんとおじさん」
俺の問いに答える代わりに後ろをみろと親指で背後を指す。軽自動車が一台、警察上等というったふうでバス停の前の路肩に止められてた。
……？　おじさんたち、軽に車かえたのだろうか？
「あんなかで待ってるわけ？」
「は？」
「おーよしよし。今度は一体何のワザで、」
「冗談！　冗談だってば、ちっさい男ねー」
「ちっせぇのはおめぇの背だ」
「アレ、私の車」
……。
「うそーん。じょうだーん。だいたい前期おわってからまだ三週間しか、」
「合宿のキャンセルがあったから、」
栞が俺を見る。にっこり。いいなぁ。いやー可愛いなぁ。こいつ、どうやったら気絶させられるだろうかなぁ。
「行ってきた」
にっこり。
「んで免許とった」
にっこり。
「んで車買って、うおあ！」
少し難しいが今度は座りながら中腰のコブラツイストにもっていった。
「ごら。このブルジョアが！人が必死にバイトしてるときに親のすねかじりですかーい？返事はー？」
「ぐっじょぶー……」
案外こいつはマゾかもしれんな。
「あ！　あ、ちょ！　希未さんおりきてきた！　ほら来たってば！　離してって！」

俺が視線を山道の参道に向ける間に栞は抜け出し、ありえねぇと呟きながら服を調え、急いで軽に戻り、助手席から菊の花束を持ってきた。
まぁ意外に気がきくしな。コイツはなぜかねーちゃんに懐いているし、ねーちゃんも栞のこと結構可愛がってるし。嫌な関係だな。俺って板ばさみ。
「あーん、今日も希未さん綺麗だなぁ。私もあんなふうになりたいなぁー」
「無理だろ」
ソッコーダメだしすると睨んできたけど気にしない気にしない。事実的に身長差が十五以上ある時点で不可能事象ということに気づかないか。
そうしてるうちにねーちゃんが俺たちの目の前五メートル辺りのところであらあらと声を上げた。
「栞ちゃん、お盆なのに熱心にくるわねぇ。今時の子供ってね？ほら」
「いえいえ！　家の墓参りですし。当然ですよー、お盆ですしね」
そうね、とにっこり笑ってから長い黒髪をらさらさと揺らしながらあれ？　とあたり見回した。
「おじさんとおばさんはこられないの？　今日は栞ちゃんだけ？」
ふむ。あの軽に驚かないとはどっかで電話かなんかで免許とったこと教えてたなこの野郎。
「後からきます。私が済むころには来るんじゃないかと……思うんですけれど……」
少し言葉を濁し、上目遣いにねーちゃんを見た。ねーちゃんもすこし悲しそうに両目を細める。
そうすると悲しいのか、笑ってるのか、俺でも判別できない。
「そう。わかったわ。じゃぁそろそろ帰りましょうか。邦彦またせて悪かったわね。帰りなんか奢るわよ」
「おう」

そういうと早々に運転席に消えるねーちゃん。
ったく。なんなんだろうな。本当になんなんだろうな女って生きもんは。全然わかんねぇや。だから身近な女に聞く。
「栞さぁ、まだおばさんあの調子？」
「うん。まだね」
そのまま俺は言葉を探したけど、ふざけるにも冗談言うにもなにも思い浮かばなかった。
とにかく暑い。ムシムシしまくってこのままじゃリアルで死にそうだ。
俺は視線を落としてサンダルのかかとをつんつんと捻り、栞は栞で菊の花をくるくるくるととのえている。
「……まだかー」
やっと声にだす。
「だねー」
「めんどくせぇなぁ女って」
「んー？　それって私のこと？」
ん？と視線を上げると不満げな、いかにもちょっとそこで不細工な男にナンパされたのでイライラしてますって感じの顔している。
「お前含め全部。じゃぁなばーか」
「あいよーちょーあほー」
ははっと俺は笑ってねーちゃんの車に乗り込む。俺が扉を閉めて早々に発進させた。参道を登っていく小さな影が横にみえ、森林にすぐに消えた。流れる景色に少しめを凝らせ、俺は言う。
「ねーちゃん」
「んー？　何？」
「大丈夫？」
少し間があった。
「大丈夫って？　別に結構涼しかったから大丈夫よ？」
と笑いながら言った。

そうじゃないだろう、なぁ？

そうじゃない。

「そっか」

でも俺ははにかみながらねーちゃんに笑顔を向けた。

メロンパンが好きだった話二

東北にある大学でも、夏は夏。ぜんぜん過ごしやすいだろうなんて考えてるのはアマちゃんだと俺はいいたい。
そんなわけで、冷房こわれてんじゃねぇのか用務員のジジィは何してやがるという大教室で、聞いてるだけで寝ててもいいとか、話したらそれだけで単位落とすぞとか、隣の人とは席を一つあけなくちゃだめだよとか、まぁとにかくいろんな教授の集中講義をのりきって現在十二時ぴったりに学食で飯にありついている。

本日のメニューはリーズナブルな大学食堂ほこる塩ラーメン。無駄に多い野菜と独特のしなった麺が人気の一品。これを食べずしてこの大学のなにを語れるというのであろうか。いや語れない。で、
「なんでお前とメシ食ってんだろうかなぁ」
俺がズルルと麺を啜った後、しなしなのもやしを口に入れる。俺はどっちかっていうと麺食なのでご飯系は二割り程度の頻度でしか食べない。
「なにそれー。なんか不満？」
そのあんまり食べないご飯系にカテゴライズされる牛カルビ丼とサラダを俺の向かいの席で食ってる栞が言う。
まぁあんまり認めるのは癪だけど、結構可愛い系ではなく美人系なので別段黙って座ってれば俺も気分的にはいい。黙ってればだけど。
……ちょっ癪だけど。
「どうせくにぴーも午後大脳病理学一般のやつ、一個あるんしょ？
私も同じ。ほーらどこにも不思議なことはないじゃなーい？」
「ありまくり」

ていうかくにぴーって。
「お前、あー……早川さんとか鈴鳴さんとかどうしたんよ？　あいつらと食えばいいじゃん」
俺はトレイの横にある三つあるコップのうちの一つを開ける。俺はかなり食事中に水分を摂取するので三つでたりるかどうか微妙なところだ。
「みんなさぁ、午後のヤツ、どれもとってないからちょうど合わなくって。先にカラオケいっちゃったよー。今週中には実家かんえだってさ。そっちは？　あの、ぼさーっとしたやつとなんか理屈っぽそうな人。いたら暇だから一緒に食べたりしてないんよー？」
「それは大いに残念無念ハラキリ切腹だが、人の名前くらい覚えとけよ。誠のやつは別んとこで食うって。午後サボんだと。飛鳥もそれに同じく」
俺が最後の麺を口にいれ、どんぶりを持ってずぞーっとスープを一気飲みする。そしてまた水を飲む。まぁこんなんであんまり腹は膨れないけど。
「ふーん。みなさん不真面目だにー。その点ではくにぽんは大真面目だね」
「ぽんとかぷーとかいうなよ」
「あーはーー。いーまさらじゃーん。もう何年付き合ってと思ってんのよくにぴー」
俺はコップを置いて、食堂のカレンダーで日付を確認して、腕を組んでしばし黙考したあとにうんと頷いて、
「十一年と十ヶ月」
「マジメに計算すんな」
突っ込みを頂いた。
「ていうかさぁ、」
カレンダーを見たついでに少し気になったこと思い出した。
「盆明け早々に授業っつーのもだるいなぁ。このへんは教授の謀略だと思うんだが」

栞は俺と違ってこのクソ暑いのに湯のみの緑茶を啜って、んーと唸る。
「そうなんだよねー。うちも父さんとかお母さんとか今の時期いろいろ忙しいから私も手伝いたいんだけどね」
「あーやっぱそうなんか。まぁこっちもねーちゃんが落ち込む時期なんでいろいろ忙しい、ってわけで俺は終わったら院のほうに顔だしてくっから」
……？なんか栞が眉を顰め、汚いもの、例えば一週間あらっていない男物のトランクスとか、をみるような目で見てきた。
「……邦彦、あんた気遣いってもんないのね」
俺は少しにやりと笑って、
「身内だからな。気遣いはほんのちょっとのほうがちょうどいいんだよ。ていうかきーつかうから今日顔出すんだろ。もっともお前には気遣いなんかゼロに近いけどなー」
「はーやだやだ。そんなだからこの前の彼女にも逃げられなんじゃない」
「んー……お前前から思ってたけど何気に食うの早いよな。太るぞ。確かこの前四十キロ、」
手刀が飛んできた。軌道は首。目の視界で捕らえてはいたが避けれないほどじゃない。が、ぎりぎりでかわす。
「気遣いないからいってやったのにー」
俺は口に残った麺を啜って顔を引いたままにこっと笑った。
「……ご近所で地元民って嫌よねー。からかう相手がくにちゃんしかいなくなるからなぁ」
これってからかいなのか。それだったら驚きだ。
「そりゃお互い様。皆様お家が恋しいのよ」
あっそ、といって栞が立ち上がり先に早々にトレイを返してきた。
「先いくからね。希未さんにちゃんと気ー遣いなさいよ」

はいはい、と俺はコップの水に口をつけ、栞が俺の横を通って、
「ぶっ！！」
一瞬なにが起こったがわからなかったけどすんごい衝撃が首筋にきて、すこし目がくらくらしてあと少しでブラックアウトしそうになったので水を噴出した。俺は急いで後ろを振り返るとにこにこ笑いながら栞が学食の出口に向かって早歩きで逃げていた。
「てめ！　首に手刀は反則、っていうか死ぬだろが！」
「さっきのお返しー」
そういって右手ををひらひらさせながら階段を上っていった。あー……ったくもう。手加減しらねぇんだから。マジで首すじが痛い。

葉山栞。俺と同じ十九歳。東北大学医学部の一年で俺とご近所の幼馴染。断っておくけど異性の幼馴染なんていう甘い響きになんのメリットもなく、まぁアレはそれなりに美人だし？　まぁもてるそうだし？　そのへんはみとめるけど俺をからかう、時には殺す勢いで俺にちょっかいだしてくるというどうにも頭の中にはディズニーとミニーが同棲してんじゃねーのかというちょっとガキっぽいところがあるのが難点。
聞くところによると俺だけ、のようだけど。まぁ当たり前。出会いが出会いだし。
俺と栞は小学生の時、空手をしてた。初めの出会いは別の小学校にいた当時道場のちびっ子最強だった栞を練習試合で負かして、なんでか俺の小学校に転校してきて、お決まりのセンセーの挨拶の途中に取っ組み合いの喧嘩が勃発して、それをとめようとしたセンセーが流れ弾の拳をくらって、鼻血をだしながらなきべそかいて、
「暴力児童の相手はできません！　クラスを変えてください！」
と校長センセーにいったのは今のその小学校でも語りつがられてる伝説。いや、噂？
はぁっ、とつまらんこと思い出した俺はため息をついてトレイとなにもはいっていないコップ五杯を戻しに立ち上がった。

ねーちゃんは別に文型ってわけじゃないけどどうやらそっち系はあってたらしく、途中で転部して現在は人類生物学の専攻で院生をしている。……まぁ気持ちっつーのはだれでも変るもんだし。

俺が授業中に居眠りしていた栞の頭を支えていた腕おもいっきりはずして机にガンっとぶつけてやった後、そのまま大学院がはいってる研究室にいった。

このへんまでくるとさすがに機械工学とか一緒なもんだから廊下はかなり雑多な感じ。エレベーターで四回までいって、「第四実験室」とプレートがかかってる真新しいしろい扉をノックする。そして失礼しまーすといってドアをあけると、

「うわっ！」

なんだこれ……。すげぇ暑い。半端じゃなく。しかもなんか麻酔のような変なにおいがする。

デスクとコンピューターが置かれている目の前の部屋じゃなくて奥の部屋か……。

まさかまた……。

俺は実験室といわれればそうかもと思えるし、倉庫ですといわれればそうかもとおもえる鴫原研究室に入っていく。

壁にはいろんなものがしきつめられ、それでいて新築の部屋を汚く見せたくないのか整然と整理されている。その部屋の実験台の中央で変な形のフラスコにつながれ、ほかにもアルコールランプでこぽこぽいってる器具の前で、パイプ椅子にのけぞって寝ているかのような男性がいた。見る限りねーちゃんはいない。

「ん？　おや」

気配に気づいたのか、男性、柏尾正樹さんがその端整な顔を不精ひげとねむたそうなめで見てくれた。

「おおー、邦彦君。なに？　お姉さんに会いに来たのかい」

そういってよいしょっと体勢をもどし、フラスコに溜まった透明

な溶液を水で薄め、少ししてちびちび飲み始める。
俺は柏尾さんの向かいに腰をおろしてげんなりしながらいった。
「……なにしてんすか」
「なにってー……。酵母菌つかってのアルコール発酵？ほらー、これならお酒かわなくていいじゃん」
「だからこんなに暑いのか……」
発酵に必要なのは養分と温度。室内が三十度ってのも頷ける、が、その留守番の研究員がかってに酒つくって酔っ払ってるっていうのは頷けない。
「……ふぅ。よくねーちゃんはこんなとこ辞めませんよねぇ」
「まぁあれも好きだからねぇ。俺もなんでこの研究室いるわかんないんだけどねぇでも、」
……ん？
「でもなんすか？」
「あ、いやなんでも・・あ、来たよ。ほれ」
柏尾さんの指先にしたがって目線を出口のむけるとコンビニの袋をぱんぱんに両手にさげたねーちゃんが俺をみてぼけーとしていた。

メロンパンが好きだった話二

「あー……ねーちゃん」
俺は研究室中の窓を柏尾さんの抗議を聞き流しながら開け放ち、なぜかどっかり食料を買い込んで俺の前で黙々と食いながらパソコンのキーを叩いているねーちゃんに言った。
「それっていわゆるー……やけぐい？」
ねーちゃんは見かけによらずかなり食う。もうお前の胃はブラックホールか超新星爆発でもした恒星が入ってんのかと思わされるぐらい食う。
俺は呆れながらも向かい側に座ってその様子を冷静に観察していた。アップにした長い髪がひょこひょこ動く。
左手のおにぎりをちびちびとだが確実に食い、食い終わったらスーパーの袋をごそごそとさぐり次の目標をロックオンする。
「違うわよー。ただの栄養補給」
んなわけあるか、と大声で言いたい。言えないが。
「その栄養はどこにいってんだが……」
「んー……。脳みそ。頭使えばいくら食べても太らないんだけどねー、と現代のエライ人がいってましたー」
ふーん……。それにはまぁ納得できなくもなくなくなくなくなくない。
現にねーちゃんは身内の俺が言うのもなんだけどかなりの秀才で、この鴫原研究室だってそのへんの馬の骨じゃちゃっとやそっとじゃないれないハイスッペク集団だし、その長である鴫原健三教授は名刺に全ての肩書きをかいたら自分のの名前を載せるところがなくなるという俺から見れば神様のような人だ。

まぁんで、そのＭＩＴと喧嘩をやらかしても勝つぞとかいっちゃう変人、いや、天才集団からのスカウトがあったのはねーちゃんが初めて。教授が是非ということだった。まぁ、医学部にそのまま在籍してれば確実に主席で卒業して国内だけじゃなく国外からも誘いがたくさん来ただろうってのが噂。転部する時に学部長直々に止めに来たぐらいだし。

「まぁそんなことどうでもよくてー、なんのようできたわけー」

メロンパンをもぐもぐと食いながら相変わらずの速度でキーをたたく。

「なんのようって…。毎年きてるからわかるだろ……。ねーちゃん的にはもうどうなわけ？」

すこし沈黙。ちなみに柏尾さんは横の研究室で酔いつぶれてお眠り中。

「まぁ、昔よりは落ち着いたわよ」

「嘘つけ」

「嘘じゃない」

「嘘つけ」

「嘘だけど」

ふふふと、食べるのを止めてねーちゃんは笑い、はっと俺ははにかんだ。

「嘘だけどさー」

んーっと背伸びをすると俺と少ししか背が違わないその高い身長をみせるように席を立ち、ぜんぜん涼しい風なんかはいってきやしない窓際に腰を降ろして大学の外に目をやる。

「それでも落ち着いて来たっていうのは本当。うん、本当なんだけどね」

ゆらゆらと風がないはずないのにねーちゃんの綺麗な長い黒髪が揺れている。

俺は相変わらず表面上ははにかみながらねーちゃんの独白のような言葉をほおずえしながら聞く。

「でもそれって悲しいことじゃない？　そう思わないくにぴー」
「……栞経由かな？」
「うん」
　にっこりと笑う。
あとで延髄蹴りで沈めてやるあのごく潰しが。せっかくのシリアス場面が台無しだ。
「あー…えっと栞が置いといて。悲しいって？　落ち着いてきたってことは単純悲しいのがなくなるわけだろ？　どうしてまた」
　そう俺が言うと、また長い髪を揺らしながらふーんっと左右に頭をゆらす。別にふざけてるわけじゃなくて本気で考えてるので、この辺が天才とバカは紙一重っていうのかなぁと思ったり。
「それは……最初は物凄く悲しかったわよ。それは否定しない。毎年この時期がくると悲しくなるし、先輩の亡くなった日がくるともっと悲しくなるのも事実だしね。でもねぇ、それもその時だけ。所詮は他人で、その場にいなかったわけだし、固執しようにも固執できないのよ」
　そこで一息止めてふーっと息をはき、座っていた窓枠から腰を上げるとまた俺の向かいの席に戻ってきた。
「例えば。先輩はメロンパンが好きだった」
「うん」
「例えば。先輩は食後に六十円アイスを食べていた」
「うんうん」
「例えば。先輩は夕食に一回はカレーを食べる」
「……」
「例えば、」
「なんで食べ物ばっかなんだよ」
　ふふっと笑い、
「邦彦がとめてくれるかなーって思って」
　げんなりする。心底げんなりする。
げんなりするのは栞だけでおなかいっぱいです。姉さん。

「まぁ、こうやっていろいろ覚えてるけど、そのうちわからなくなるの。どうやってたべていたかとか、どんな表情してたかとか」
「……」
ねーちゃんが言いたいことが段々なんだか見えてきた。この四年、こうやってねーちゃんが結論めいたものを言うのは初めてだと言うのに。ようやくわかる気がする。
「……そうね。『忘れちゃうの』よ。人間てね。いくら悲しんでも衝撃的でトラウマになったとしても、事実は薄れて、後に残るのは悲しみだけ。たぶん今年のこのお盆の沈んだ気分もそのうち薄れちゃうわ。つまりそういうことなの。いくら…大切な人だったことでもね」
ふぅ、っと息をはいてスーパーの袋からコーラを出してあけると一気に半分までからにしてそのまま口を閉じてげっぷする。一応このへんの慎みはある。
「そして一番の悲しみは……『忘れていく自分というものに気づいてしまう』ことよ」
俺は目を見張った。まるで居眠りしてるとこに後頭部に一発パンチをくらったかのような、推理小説の探偵の謎解きに多いに納得して得した気分のような、目が覚めた気持ちになった。なるほど。なるほどね。そういう考え方ね。
『ねーちゃんはとっくに気づいていたんだ』。
「当事者しかわからないこと、っていうやつかな？」
俺は勝手にねーちゃんのコーラを取り、そのまま飲む。
「当事者でないけどね」
そう言って笑顔を見せ、そしてまたどこか気持ちを漂わせるような表情になる。
「彼のお墓参りにいく悲しみも、去年の一回忌の悲しみも亡くなったという報告を聞いた悲しみも、全部薄れちゃって、思い出せなくなる。そしてやっと気づくの。しばらくして気づくのよ。『ああ、私は彼のことをだんだん忘れていってる』ってね」

ねーちゃんは普通だった。いたって普通だった。でも俺には悲しんでるようにはみえなかった、だけかもしれない。
人の感情を表に見れるようになったらどれだけ楽だろうか。きっとそれは適わないだろうけれど。
「時間て残酷よね。人間て残酷よね。でもその残酷さが人間だもんね。それがなくちゃ人間じゃないもんね。だから私はこの悲しいっていうのを大切にしたいの」
「……それって引き摺るってことにならない？」
ううんっと髪を揺らし、左のほうの髪を耳にかける。
「そうじゃないわ、あくまで記憶を留めるだけ。といってもさっきも言ったけど忘れちゃうから。んー、ちょっとこんがらがってきちゃったわね。んー……」
んー…とだんだん頭を傾け、ついにはごん、っとデスクに頭を着地させながら考え、あ、と結論がでたようだった。頭を起して髪を手串で整えながら、
「悲しみを忘れるのは当然。だからつまりはよくい言う、彼の思い出を大切に、ってことね」
にっこりと笑い、俺もふーんと唸りながら顔を横にそむけにやりと笑う。スーパーの袋からおにぎりを取り出してあけながら言う。
「忘れないと悲しい。でも忘れていくことも悲しい、か。ねーちゃんらしい考えだな」
そういって俺はたらこおにぎりを食い、食ってる途中でいったい何日ぶりにご飯をくったのだろうとくだらない考えが浮かんだ。
俺の独白を聞いたねーちゃんはなぜか複雑そうな表情を一瞬だけ浮かべ、
「そうかしらね。案外みんなそうなのかもしれないわ。失礼だけど葉山のおばさんだっていつまでも悲しんでるけど、それはただ近すぎて見えないだけ。遠くなったら、私見たく遠くなったらいつか気づいてくれるわよ」
気づいてくれる。希望的な言い方なのはそうなるだろうという予

測なんだろうな。
人は立ち止まっていられない。きっとみんなずっと歩いている。だから自分が泊まっていることにいつか気づくだろう。
「だから」
こんこんとデスクトップのパソコンの液晶画面をこつこつとその長い人差し指で叩く。
「それを考えるためにここに来たの。あんまりみんなはよくは思ってくれてないけど、今度の論文を学会で発表したら私もなんだか終わるような気がするわ」
ふーん……。あ、そうだ。
「柏尾さんがなんか言いよどんでたけど、ねーちゃんのことで。それってそのせい？　俺はてっきり人間蘇らせる研究でもしてんのかと思ったぜ？」
「正樹はお兄さん肌だからねぇ。心配を人一倍してくれるのよ。まぁ今度ので終わると正樹も安心するでしょ。それに人間が蘇るのはＳＦとアニメの世界だけよーん？」
ぴんっと俺のでこにでこぴん一発をかますねーちゃん。
俺は思わずにやにやして、ケータイを取り出した。あいつは寝てるかなぁ。ああ、いや絶対寝てるな。バカだし。
「まぁ、ねーちゃんがそうなら俺は何も言わねぇわ。自分がしっかりしてるみたいだし。暇だから栞でも呼ぶわな」
弟に心配されるなんてー、と何気にかなり不満げな表情を浮かべたけど、またもぐもぐと食い散らかしながらパソコンのキーを叩き始めた。
さてさて、栞のヤツは何回のコールで起きるのだろうか。
「二十回。留守電含め」
そう自分に呟いて着信履歴から電話した。
食べながらにこにこ笑ってるねーちゃんをみていると本当は早く食料食いたくてあんなこと言ったんじゃないかと疑問がでてきてにやにやしてしまい、意外にも七回のコールで怒声で電話にでた栞に

対応しそこなった。

日常と異常一

昔の話だ。

そう――そんな近くなくて、遠くもない、昔の話だ。

俺の記憶は曖昧で、一体どこからどこまでが俺の記憶なのかが未だに判別に困る。

でもあの日は、とても寒い、雪が降り積もった後の朝のことだということを覚えている。

俺は中庭を囲んだ廊下ただなんとなく歩いていた時だ。気慣れない真っ黒な学生服をずるずるとひきづりながら雪が結晶の塊のように降り積もった中庭を横目に歩いていた。

家は広く、古き善きの日本の家というのがぴったりだったけれど、人の生気というか、その生活らしさがまったく感じられない空間だった。新しく隣に建てた新築の家に家族が移り住んだということもあるんだろうけれど、それはそれでなんだか悲しい気がした。

だから俺は周囲に漂っている悲しい雰囲気から逃れるように長い長い廊下で囲まれた中庭沿いを飽きもせずに回っていた。

本当に雪は綺麗だった。

美しい。とっても美しかった。

はらはらと舞うその一つ一つはすでに降り積もった雪と同化して、鈍い光を反射する。埋もれた池や木に積もるその一片達は俺と同じように飽きる事無く降り続いていた。

きっと。人の命もこんなに儚いものかもしれない。

俺はそんな無意味なことをしていた時だった。

廊下沿いの部屋、ある和室から声が聞こえた。そこは自分が記憶している限りでは客間で何もない部屋だったはずだ。

俺は何も考えずにふすまに手をかけ、半分ほどあけると――

そこには俺の通っている高校の女子制服を来た、髪の長い女の子がいた。

――栞。
そう、確か俺はそんなふうに呟いた筈だ。
栞はまだこの頃は背中ぐらいまで髪が長く、いつもポニーテイルにしているのに「今日の日」はそれを解いていた。
薄い光を照り返す髪が彼女の服に散らばっていた。客間は大きなテーブルに奥に床の間、たんすが一つで、栞はただ薄暗い室内の中央で壁に背中を預け、体育座りで膝に顔を埋めていた。
躊躇った。なんて声を掛ければいいのか。俺みたいな奴が栞に声をかけていいのか。
彼女はいまにも崩れ落ちそうで、少しの反応で砕け散りそうなガラス細工のようにさえ思える。
俺はそれなりに空気とかそういうものを読めるものだと思っていた。でもこんな状況になればそんなもの、なんの役にも立たない、ただの表面の「イイヒト」面するための道具でしかないということ深く深く思い知った。栞を本当に思うなら、こんな躊躇はしない。でもそれは偽善じゃないか？
不幸を知らない人間が、少なからず幸福である人間が、不幸である栞に声を掛ける資格は――あるのか？
『僕が栞に声を掛けたからって何が解決するっていうんだ？』
そんなことをふすまを開いたまま、栞の蹲る姿を廊下の冷気で足の感覚がなくなり始めるまで考え、口を何度も開いては閉じる仕草をしてからようやく音を喉から出せた。
――栞。……だから、そろそろ……う。い……皆、その、なんだろう自分の記憶が曖昧だった。でもきっと心配しているようなことは言ったはずだった。
頭の中にずんぐりとした靄が立ちこめて、俺が「何を言ったのか」正直わからなかった。
するとまた右手廊下の母屋から男女一組が歩いてきた。
――飛鳥、早川さん。
そこにはやはり同じ高校の制服を来た同級生が立っていた。

向野飛鳥（こうのあすか）と早川菜々子（はやかわななこ）。どちらも中学からの付き合いで顔見知った間柄だけど、今日の二人はきっと俺のように辛辣な表情をしているのだろう。特に早川さんはずっと悲しそうな表情をしている。

飛鳥はバスケ部で根っからの体育会系で単髪に高い身長、筋肉質な体だがその外見とは裏腹に繊細な性格をしてると思う。よく気配りができるというか。

対して早川さんは綺麗な腰まで届く黒髪を髪ゴムで一つにして、その整った顔を厳しくしている。普段は鈴鳴さんよりはおとなしいが「こういう時は」なぜか必死になろうとする。その理由はきっと友達思い、だからだろうと俺は勝手に決め付けていた。

飛鳥はふすまのなかの栞と俺を見比べ、そして明らかに眉を顰めた。

――お前、何してるんだよ。

明らかに嫌悪が混じったその言葉。

言葉は曖昧だったけれど意味は明らかだ。

一番近い存在なのになんでこんなところに突っ立っているんだ、と。

なぜ助けてやらないんだと。

そう、非難めいた言葉。

だから俺はまた口ごもる。そして、

――俺が、話しかけていいのか？

――あ？

飛鳥は剣呑な言葉とは裏腹に冷静な表情で俺を見て、言う。

――まさか、お前がそこまで自己中で鈍感の極みだとは思わなかったぜ。

言っていることが分からなかった。話かけない優しさがなぜ自己中なのだろうか。なにが鈍感？　俺はなにを間違えたのだろう。いや間違ってはいないのだろうか。

そんな俺の様子を見てか、早川さんが俺を一旦睨みつけると、長い髪をなびかせて何の躊躇いもなく和室にはいっていき、栞の前で

膝を折った。
――栞、お母さんもお父さんも心配してるよ。私だって心配してる。あっちに一緒に戻ろ？
早川さんが優しく声を掛けて栞の肩に手をかけるが、栞は顔上げもしなかった。
――いやだ。
鋭く、それでいて静寂をもらたらすだけの迫力のある言葉。栞がそう口にした。でも早川さんはそれでもめげないのも凄い。
――いやだって……いつまでもそうしていても、
――いやだっていってるでしょ。
また端的に栞が言う。そして、
――わからないかなあ……、わからないよね、私の気持ちなんか。どうせいつも元気だから今日のお通夜で落ち込んでいるんじゃないかとかそんな程度しか、知らないよね。でもね、そんなの私じゃないの。私はもっと醜いんだよ。ななっちにも見せられないほど醜いんだよ。きっと私は一生このままなのかもしれない。きっともっとずっと前からこのままだったはずなんだよ。
そこで栞は蹲りながら少し嗚咽を混じらせ始めた。
いつも知っている栞じゃない栞が――そこにいた。いや、「知ろうとしなかった」だろうか。
だから俺達三人は、動けなかった。
――例えばそんなことを思っちゃう人って、それって決定的に人間としてかけてるよね。私は私のことはもう人として駄目だと思う。人はそんなこと思っちゃ駄目なんだよ。本気で思っちゃ駄目なの。
俺は何か言おうとした。早川さんも何か言おうとした。でも言えなかった。
――お兄ちゃんを殺した人が憎い、なにより、
そこで、涙でぐしゃぐしゃになった栞は顔を上げた。その顔は少しだけ笑っていた。
――希未さんが――殺したいほど憎いんだよ。

――俺は、

そこで曖昧になった。
映像が刷れる様に遠くなる。
俺はなんて声をかけたのだろうか。

それにあいつは……ねーちゃんを殺したいほど憎いんでいた？

なんで？

日常と異常二

□

目を開けると薄暗い。体を少し動かすとあちこちが悲鳴をあげ、無理な体勢をしていたのがよくわかった。
なんだかまだ身体を動かしたくない気分だった。どこかまどろんでそれが嫌に気持ち良かった。
まるでどこか遠くにいっていたような錯覚。そして帰って来た安堵感。その気分にずっと浸っていたい欲求が強かったが、まさかずっとそうしていられるはずもない。そう理性が俺の背中を押し始める。
目を開けるとまず入ってきたのが窓越しに焼けるように空に張り付いた夕焼けだ。眩しすぎて一瞬目をそむけようとしたけれど、そのまま夕日を少し見ていた。
そして身体を起す。腕には赤く色が変わった部分があって明らかに突っ伏して寝てしまったことが分かった。
首をほぐしながらまだ冴えない頭で研究室の壁がけ時計を見ると六時前。
「……あれっ」
何かおかしい。
じゃぁ何がおかしいんだと聞かれてもきっと答えられない。物凄い違和感。体が遊離してここじゃないどこかに行ってしまっているかのような錯覚。
頭が回らない。まるで真っ白のまま意識があるようで気持ちが悪い。

俺は怯えるような動作で夕日の中周囲を見回した。
壁際の乱立するロッカーは中身がごちゃごちゃで、一回開けた時にはそのなだれに押しつぶされた記憶がある。なんでガスタンクなんて置いてあったんだ。
研究室は四部屋に分けられていてここは主にねーちゃんが使用している、というか私物化している部屋だ。長いどっしりとした机が二つに椅子が複数。横にはパソコンデスクに二面のディスプレイのパソコン。ここもどこも雑多に書類で溢れかえっている。それにつけっぱなしなのかパソコンのファンが回る音だけが室内に響いていた。
異常に寒いのはどうせまたねーちゃんがエアコン設定をがんがんに冷やしたままどこかにいったからだろう。そう意識すれば物凄い寒さを感じて机の上のリモコンを手繰り寄せる。
十九度設定。ねーちゃんは俺を凍死させる気か。エアコンの電源を切って、ふと、ようやく、そこで、
「……ねーちゃんは？」
不思議とそんな独白が出た。
なぜだかわからない。急に自分の姉がいないということに不安が出た。
いや恐怖と言ってもいいかもしれない。そんな焦燥からやく椅子から立ち上がろうとすると、部屋の左からのドアからその当人が姿を現した。アップにしていた髪は解けていて着ていた白衣もだらしなく着崩れ、下の私服なのかカットソーにジーンズ姿もなんだからズレてる。
もういい大人なんだからちゃんとしてほしい。
部屋に入ってようやく気づいたのかねーちゃんが首を傾げた。
「あら、起きたの。随分寝てたから起さなかったわ。親切にも冷房いれてねー」
「その親切はいらないんだけどな……」
「で、なんで泣いてるの？」

「えっ」
それで初めて自分が涙を流している事に気づいた。目からは無いけれど頬に伝うそれは確かに涙だった。
「なになに？　どうしたの？　なんか怖い夢でも見た？」
全然心配そうじゃない調子で俺の顔によって来るので引きながら言う。
「だっ！　べ、別にそんなんじゃねえって。なんだか、いや、わからない。とにかくなんでもない。突っ伏して寝てたから目が痛くなったんだよ」
俺は急いで涙を服の袖で拭いながらねーちゃんを押しやった。
俺の小学生みたいな誤魔化しと曖昧な答えにそう、とねーちゃんはさもそうね、と言わんばかりにすぐに納得した様子だった。
それだけ言うとよっこいしょ、とパソコンの前に座る。
「栞ちゃん呼んだでしょー？　でもそのあと急に寝ちゃったから。怒って帰っちゃったわよ。あとで謝っときなさいねー」
「ああ、あーうん」
なんだかねーちゃんと話しているだけでさっきの妙な違和感が、消え去った感じがした。
「なあ、ねーちゃん」
「んー」
早速資料に目を通しながらパソコンのキーをカタカタやってる姉に声を掛ける。夕日はしぶとく空に張り付いて紅黄色を周囲にばら撒いている。
「俺って、その、どんくらい寝てた？」
「はー？　えーと……邦彦が栞ちゃんを電話で呼んでーそんぐらいかな？　寝ちゃったのは。ということは大体四時間も寝ていたことになるかな」
「なんでそんな推測口調なの……？」
「だって、その後私も寝ちゃったから」

――なんだって？
「それでさっき起きてね？　あ、ということは邦彦と一緒に寝ちゃったってことかな？　いやらしー」
「……あー、うん」
いつもより反応が物凄い薄かった俺にねーちゃんは小首を傾げ、つまんないのなんて呟いてパソコン作業に戻っていく。
この違和感。なんだか起きた瞬間に寂しさと、取り残されたという虚無感。
友達と離れたくなくて別れ際の道路で話しているようなそんな憧憬。
「俺は誰かと一緒に寝るということを感じていた」のか……？
いやそんな浅い理解じゃない。誰かと、そう、一緒に『あっちの世界』までいっていたそんな――
あっち、ってなんだよ。意味分からない。でもその言葉が一番しっくりくる。
思索していて急に怖くなった。
自分が怖くなった。
なにより「他人を食い物にしているような結果になる気がして」それを認めたくなかった。
だいたい荒唐無稽だ。そんなことが――あるはずが、ない、よな。
第一俺は夢の内容を覚えていないんだから。
「邦彦」
「えっ！」
ずっと考え事をしていたため変な声がでた。そんな俺にねーちゃんはやはり首を傾げる。いつのまにか作業を完全に止めて僕のほうに向き直り、心配そうな顔で見つめてくる。
「大丈夫？　なんか体調悪そうだけど？　内科専門の助教授知り合いにいるから点滴でも打ってから帰る？」
凄いことを仰る職権乱用姉。でもそれがまかり通るほどねーちゃ

んは凄いと言うことでもあるが。
　そういえばなんだか冷や汗が異常に出ているし少し動悸も早い気がする。俺は少し息を深くすって吐く。
「いや、大丈夫だよ。……多分起きぬけでぼーっとしていたからだよ。あれだあれ、血圧降下症」
「降下症は慢性疾患……じゃなくてはい、水でも飲みなさい」
　そういって直ぐに立って横の冷蔵庫から封を切ってないミネラルウォーターを差し出してきてくれた。
「ああ、ありがと」
「あのちょっと唐突だけど、さ。もしかして夢とか見なかった」
「え？」
　俺は渡されたペットボトルの状態で止まる。
「……わからない。なんか、こうなんていうかもやもやして」
　そこで美人というよりも丸顔で整った可愛らしい顔立ちのねーちゃんは眉を顰めて、
「もしかして栞ちゃんの夢とかみなかった？」
　――そう、かもしれない。いや。
「あー、いやわからない。内容までは覚えてないし。でもなんだか凄く懐かしい夢だったのは覚えている」
　そう、とすぐに優しい顔になり、パソコンデスクに戻っていく。
「ていうかなんだよ急に」
「べーっつにー？」
　そんな声ではぐらかす。よくわからん姉だ。
「あー、ねーちゃん、超能力研究してる人って、いる？」
　なぜ自分もそんなことを聞いたのか分からない。でもそう聞いたほうが言いと思った。さっきのような変な考えに押されてだろうけれど。
　でもきっと自分はそんな奴じゃないと、だたそう思いたい。
「ちょうのうりょくー？　それだったら正樹がちょうど専門だけど。急にどうして？ＥＳＰ？　ＰＫ？」

ああ、そう言えば柏尾正樹。この鴫原研究室で概ね心理学や超心理学などを中心に研究している人だった。ていうかＥＳＰとかＰＫってなんだ？

「そっか……それだけわかればいいんだ。じゃあ、俺もう帰るわ。まだ構内に栞の奴いるだろうから」

「ん。ちゃんと晩御飯食べるのよー」

それはねーちゃんに言いたい。

「くにちゃんが呼んだのにいってみたら寝ちゃっててさー揺さ振っても、叩いても、振り回しても、吊り下げても、窒息させようとしても全然起きないんだもん」

「お前それ完全に殺す気でやってるよな、そんなに補講の時の根に持ってんのかよ！」

夕暮れ。遭魔が時とも言うらしい。すでに夕方の六時を超えているため構内には人がまばらだ。院を出た後、だいたい栞は他の友人と食堂にいるので直ぐに見つかった。逆にみつけられたというべきで、いきなり胸倉らを締め上げられた。

喋っていたのはあくまで皆の夏休みの予定を聞きたくて残っていただけであって別に俺を待っていただけじゃ云々、と数十分聞かされた。

なんで聞かされたのか俺にもわからない。言い訳が好きなんだこいつは。

そういうわけで仲よく二人で帰り。メインストリートを駐輪場に向かって歩きながら栞と話していた。

「それよりもさー、この中途半端な時期どーする？　山行こうにも海行こうにももうお盆すぎちゃったからどこにもいけないよねー」

「いや確かにそうだろうけど、つかお前教習所行ってたからだろ」

そういうとなぜか口ごもる。俯くその顔は化粧は薄く、それでも白く整っていて型までの茶髪が顔にかかる可愛らしい美人、といっ

た風情。これでなんで彼氏できないのかなあなんてこの世の理を考えそうになるとまた栞が言う。
「とりあえずさ、とりあえずね？　ななっちとすずちゃんは予定ないみたいだから、どっか行こうよ」
「ああ、そうだな……。ゴールデンウィークにも散々騒いで東京行ったけど、早川さんと鈴鳴さんって、」
そこで俺は急に脚を止める。
不思議に思ってか、栞も足を止めた。俺を見て首を傾げてくる。
「どうしたの？」
駐輪場まではすぐそこだ。階段を降りればすぐ。でも、「さっきの言葉にひっかかりがあった」。
「お前、その……早川さんのこと『ななっち』って呼んでるのか？」
俺の質問の意図がわからないのかしきりに首を傾げながら、
「そうだけど……それが？」
「早川奈々子、さんだよな」
「……そうだよ。え、何？　ななっちのこと、」

「お前昔は髪が長くなかったか？」

俺の言葉は軽くて、唐突で、でも鋭利で、でもそれだけで静寂を降ろすだけのものはあった。
俺と栞は互いを見つめあった状態で静止。
むしろこの世界が止まった錯覚さえあった。
切れ目だけど綺麗な栞の瞳に俺は映りこんで、それが揺らいで見える。
栞は徐々に不器用に笑い方を忘れたかのように――顔を苦笑すると、
「え、何、それ。そんなことないよ。ていうか――ずっと一緒にいたくにちゃんが、その一番知ってるんじゃ……」
栞は断言しなかった。迷子になった子供のように目線を泳がせ、

両腕を胸の前に持ってきて口を押さえる。
やばい、俺は何を言ってるんだ。でも、ここを逃すと聞く機会がない気がする。
でも、何を？
「いや、そのお前は確かに昔長髪だったろ？　だったはずなんだ……。そう確かに、」

風の切る音がした。

静止していた世界を切り込む風の群れ。
空間に切り込むその姿――『目の前の栞が回転して背面を向いていた』。
一瞬何やってんだと呆けそうになったが、慣れのせいか目を鋭くする。この流れは――高速の後ろ回し蹴り、だ。
そこまで思考して反射で避けようと右腕を盾にする。栞のさっきまでの戸惑うような雰囲気は霧散して猛禽類のような迫力さえ伝わってくる。場の雰囲気が違う。
それもそうだ。高校上がって空手を止めた俺と違って栞は――ばりばりの現役選手なのだ。
高速で突き出される右足のサンダルを物凄い重圧と共に自分も後退、脱重してさばく
「いってー……」
思わず呟きながらそのまま腰を落として構える。こいつの足技は全て「二段構え」なのだ。ジャブが来た後は――ストレートが来る。
顔が見えなく俯いている一瞬の栞の顔がぶれ、示し合わせたように右足と左足が交代、さらに回転の遠心力が乗った左足が、俺の胸に突きささんととばかりに突進してくる。
俺はそれを――直撃を右腕に受けてからその押しを利用して足の踏み込みを脱力して左足を右側にずらした。なんてことはない、ただ重心をずらしただけだ。

そう教わった。このまま足も取ることもできるけど今はそんな必要は無い。
それで体制の失った栞はなんとか踏みとどまると、ようやく顔をあげた。
――泣いていた。
ポロポロとなんだか儚げなその表情は今の今までの殺気と相反するもので、俺も躊躇した。
「お、お前急になにマジ切れして、」
「くにちゃんは勝手だよ！」
栞がいきなり叫んだ。それに俺は面食らう。でも、なにも言えなくなった。
「そうやっていっつもいつも先に行っちゃって、私のこと考えてくれないで、でも全部終わった後にようやく気づいてこっちにこようなんて反則でしょっ！」
物凄い興奮を乗せた怒りの感情だった。もしかしたら全力で叫んでいるかもしれない。だから俺は少し飲まれた。でもここは俺が発言しなくちゃならない。
「落ち着け栞。何を言っているのかわからない。何か気に触ったら謝るし、いつもだけどさ、いきなりさっきみたいな攻撃も、」
「わかってないっ！」
叫ぶ栞。まだ混乱中なのかどうなのか。俺には栞の心の中が分からなかった。
わかってない、わかってないと俯きながら自分で手で涙を拭いていた栞は急にそのまま走り出して、国道方面に消えていった。
「あ……」
呼び止めることも出来た。
きっと走って追いつくこともできたはずだ。
でも、俺はしなかった。
いや出来なかったんだろう。
だってしっかり俺は髪の長い少女のことを思い出せていたんだか

ら。

日常と異常三

□

アパートに帰って夕飯の支度もせずにバッグを置いてベッドにねっころがると、なぜかため息が出てきた。
なにもやる気が出ない。なにもする気力がでない。いやあるんだが頭の大半をずっと占拠している考え事が、頭の中を占めていてそのせいでしようとしないことはもうすでに分かっている。
栞のことは、そう、何とかしてやりたい。あんな取り乱した栞をなんとかしてあげたい。
いや、何とかするべきだ。
漠然とそんなことをだけを考えていた。アパートにどうやって帰ってきたのかすら綺麗に記憶にない。それほど思い詰めていた。
栞と別れた後は、まあ、そのまま呆然としながらひどくがっかりしてチャリで帰ってきたんだけど。ショックだったり衝撃だったりでよく覚えていない。
あいつは意味不明な事は言っていたけれど、きっとそれは俺に関係することだ。栞はあれはあれで理不尽だけれど、あんな怒り方はしない。
ようやく気づいてとか。気づく？　何に？
それは前に俺が言った栞が長髪だったっていうことを……。
いや、何か違う。長髪自体は関係がない筈だ。「勝手に思いだして」という理由にはいきつかない。こっちが思いだしてほしい、そういったものじゃないのか？
じゃあ、「長髪の事自体、それを含めて全てを挿して言っているのか」？

じあ、何に？　栞は何に俺にきづいてほしか、
思わず俺は身体を起した。
「……栞は気づいてくれるのを、ずっと待っていた、のか？」
自分の呟きが、呟き出ない言葉が耳に入ってこない。胸の鼓動が早くなる。
もしそうだとしたら――それは凄く理不尽だ。
自然、両手に力が入ってシーツを強く掴む。口をかみ締めた。
なんで言ってくれない。俺だったらいくらでも、なんでも相談でも乗ってやるのに。助けてやるのに。
俺は栞を信用しているし、ずっと親友だとは思っているけれど、そこまで感情的になるんだったらなんで一刻も早く俺に言ってくれない。俺だったら一番話しやすいだろうし、なんで、
いやいや違う違う！　そうじゃない。なに考えてるんだ俺は。理不尽とか信用とか言ってくれないとか。そもそも俺が気づくのが前提だろ。
だってそんなの、栞が決めることじゃないか。
栞が決めて、そして栞がどうするか、待つ。
間違っても待つ。
助けてと言ってくれるまで、待つ。
それが、親友だろ？
それが一番あいつの近くにいた俺が出来ることなんじゃないのか。
栞が怒ったのは俺がそんな揺ぎ無い信用を、いつでも相談に乗れるような姿勢だってことを失望させた。気づいてほしかったことに失望させてしまった。だから――
だめだ。考えすぎてわけ分からなくなってきた。
俺はポケットからケータイを出すと着信履歴からある名前を探し出す。
「……」
でもなー。相談するにしてももう少し適任がいそうな気がするんだけど、ゼミの子とかは引かれそうだし。付き合い長くて栞の事知

ってる。相談できる。
消去法。
「こいつかあ……」
無駄に呟いてパカパカとケータイを開閉する仕草をしてから意を決して通話ボタンを押した。
微妙な間のあるコール音が続いて切ろうかと思った一一回目で相手が出た。
『ドーンっ！』
「……」
なんだか可笑しな声と共に何かを叩きつける送話口から音が聞こえてきた。物凄い音量。
『あーうん、今アタマきり落としたから。それは引き千切っちゃって。大丈夫だってそれ死んでるから、いや死んでるってばー！　もう、入らないのは黒いポリ袋に入れて山にでも捨ててきちゃってーあはははは。おー、そだそだ、おい、くにひこ、おー、』
電話を切った。
聞かなかったことにしよう。
いつものことだし。
色々おかしかったけれどそれはいつものことだし、そもそもそれがいつものことだ、なんて認識させるほどあいつがオカシイのだ。俺は正常である。ノーマルだ。多分。
なんか緊張したのが霧散しちゃったじゃないか。くそう。
そんなことを考えながらベッドから立ち上がろうとしたらケータイが鳴ったので滑り落ちそうになった。
ケータイを開いて確認すると案の定。
とりあえず息を整えてどうするか頭の中を整理してから電話に出た。
『おいおいおいおいおいおいおい。電話を掛けて来ていきなり切るなんてないっしょーそれはないっすんぐでしょー、くにひこー。なんだっ！　お腹空いてるから機嫌が悪いんだなっ！　じゃあ食べる

か！　このアタシを！』
　テンションたっけーなー、と相手の話題の間隙を探っていた俺は言う。
「俺にはカニバリズムの癖はねーから喰わねーよ鈴鳴さん。ていうかなにやってんの？」
『おー、じゃあ裸のアタシの方向を所望しているのかくにひこ！　卑猥だ！　だがそれがいい！　だが、それがいい！　大事な事なので二回言いました！　自分で言うのもなんだがそれなりに出るとこは出ているからね。ふふん』
「ふふん、じゃねーよ！　ちょっと恥らってるとこがすげぇムカツクよ！　少しは話聞けよっ！　そうじゃなくて、えっと、その、今……暇？」
『いやー、そういうリアクションはないなーくにひこー。おいお前本当にくにひこかー？　戸籍上に載ってるくにひこかー？　ちゃんと存在してるくにひこかー？　がっかりさせないでくれるかなー』
「載ってるよ！　ちゃんと区役所にあるよ！　そんなお前にがっかりだ！　ていうかお前のボケに付き合わされていたら夜が明けるからさっさと本題にはいらせてくれよ、マジで！」
『んー、だったらまずはその呼び名だね』
「は？」
『鈴鳴さんはぁーやめてくれるとぉー嬉しいなっ』
「可愛くいってもなにもでねーよ。砂すらでねーよ。あーじゃーえっと美衣、これでいいか？」
『みうのほうがいいーよぉー！』
「どうやったらそんな変換出来るんだよ。文書ソフト困らせんな」
　鈴鳴美衣（すずなりみい）。一八歳。同じ医学部に所属している栞の知り合いだ。春に色々あって俺も知り合ったのだが、最初は元気な快活な娘、っていう印象だったが、ところがどっこいこれまたぶっ飛んいるやつだった。。
　どうやら何かしたか分からないが、特待生（そもそもそんな制度

があるかどうか知らない）扱いで医学部に入った。らしい。
確かに学業成績優秀すぎてねーちゃんと何かよく分からない話をするほどいい。らしい。
何かすごいものを開発して特許をすでに数十所有しているとかなんとか。らしい。
で、だがかなりの性格難だ。
なんと言えばいいのか、とにかく面白いこと、興味があること、自分のしたいことをなんでもかんでもやろうとするのだった。
相手の迷惑？　気持ち？　そんなもの憲法のどこに書いてますか？　ぐらいの無視っぷりで他人を巻き込む。草の根一本残らず旋風するその行動は端から見ていれば楽しいものだ。
端から見ていれば、の話、だが。
だけどなぜかだれからも苦情や仲違いや訴訟（これは本気の意味で）などは一切なく、美衣は普通に大学を謳歌しているのだった。
間違った異常に大学を謳歌しているのだった。不思議だ。なぜだろう、不思議だ。世界の物理法則がきっと歪んでいるんじゃないか？　と識に真剣に相談したぐらいだ。
それで栞とは付き合いの長いななっちこと長谷川菜々子に話すには、さすがに後からでいだろうし。異常に栞に関することには敏感なので話すのが怖い。ということで残ったこいつだったのだが。
『いや今日はさー、ゼミの仲間のお誕生日会してたのさー。それでお料理上手のこのアタシがー、工作してたんだよねー』
「工作……？」
『和洋折衷のクリスマスディナー』
「今は、夏だ」
『ちっさい男だねー、たかだかあと数ヶ月のイベでしょ』
「今は、夏、だ」
二回言わせんな。……これさっきもやったな。
『四段ホールケーキにー、オードブルは結構時間かかったよー。食べきれないからって他の友人もよんでもう立食パーティーって感じ。

あ、さっきのは七面鳥を解体してたとこね』
「……こえー。お前マジこえーよ」
あらゆる意味で常識を凌駕する異常の鈴鳴美羽。実を、とかいわずとも関わりたくないやつランキング二位なんだけれど。緊急事態ってことで。
「ところでさっきから室内じゃないし、なんかがたがたやってるけど何やってんだよ」
『おお。よく気づいた。ちょっとスニーキングミッション中だ』
「ストーカーですかー。しかも実況ですか。やめてください」
率直に言った。
『ふっ、安心しなさい。アタシは男如きに欲情しないから』
「みうみうの性癖は聞いてねー」
『んっ……。お、男なんかにぃ……ムラムラ、したりしないんだからぁ……』
「エロく言ってもかわんねえーよ！」
あれ？　なんかすごい話題がずれてる。
「あーえっと、そう、でさーちょっと相談したいことがあるんだ。不本意ながら美衣ちゃんに」
『ほっほーアタシに相談とは賢明だね』
寧ろ、駆け込み寺的なイメージしかわかないのはなぜだろう。こいつは自由に生きてるからなー。本当に。
「栞、のことだ」
『……』
ここまで喋り続けて初めて黙った美衣。
栞のこと。それは「俺たち」の間では最重要問題だ。だってあいつは……。
あいつは、なんだ？　あれ？　なんで栞のことが重要事項になってるんだろう。でもそれでもいいかって気がしてくるから不思議だ。
でも何か問題があるなら助けたい。
送話口から聞こえてくるレジの音を無視して俺が再び言う。

「その栞のことについてのことなんだけどな――」
俺はかいつまんでだいたいのことを話す、が、美衣は流石秀才、俺が隠そうとしたことをことごとくと指摘、丸裸にされた。
やっぱコイツこえー。
夜風をきるような風邪きり音を響かせながら美衣が言う。
『ふむ。じゃあやっぱり栞はあれを……』
「え？　あれってなんだよ」
『ん？　いいやなんでもない。気にしないで。それより栞自身が「長髪」という単語に反応してそして「気づいてくれなかった」と言った。そしてくにひこはそれを悩みをいえない栞が、くにひこにだしていたなにがしかのサインだと思った、と』
本当は栞自身の問題で触れられないでほしいことなのかもしれない。
俺程度が触れていい問題でもいいないかもしれない。
でも――だからってなんだ？　それが助けない理由なんか、ならない。
「お前はどう思う？」
『率直に言うと、栞自身の問題だろう。例え友人であるアタシ達が触れていいものじゃない。むしろ誰かが問題を解決しようとすればもっと悪い方向に転がることだってある』
そうだろう。正論だ。
でも、俺は、
「それでも、助けたい」
『……』
「俺はあいつの抱えてる悩みを解決してやりたいんだ。自分勝手なのはわかってる。でも親友が困ってるのなんか見過ごせないだろう」
随分はっずいことをいっているけど、心のそのそこからでた言葉。
『……転機、かな』
そう美衣は呟いた。
「は？　天気？」

『くにひこがそこまで言うなら、アタシも加勢しよう。ふふふ、こんなことは新入生歓迎会以来だね』
俺の質問には答えずにやっぱり何か意味を含んだ言い方をするけれど、それには答えず快諾してくれた。
「そうか、ありがとう」
『じゃあー、まずは作戦会議だね』
そこでアパートの呼び鈴が鳴った。
「あ、ちょっと待って。誰か来た」
すると連続ピンポンをして来やがるので、
「まさか！　美衣、おま、」
アパートのドアを開けると、背の低い女子がいた。多分栞よりも低いだろう。でも日本人の平均はいっている。
上は刺繍入りのブラウスに下はパンチングのミニ。の下にスパッツというあってるんだかあってないんだか。靴は編み上げのショートブーツ。
そしてなんだか勝ち誇ったかのように満面の笑顔で俺を見てくるそいつはケータイを耳に当てたまま俺に視線を固定していた。片手にはなぜか物凄い量のビニール袋が下がっている。
眼前でみると愛らしい顔で化粧っけもなく、また腰まで届く綺麗な黒髪を今日はツーサイドにしていた。
「……お前はなんで俺の家の前でドヤ顔してるんだ？」
「どやがおってなに？」
そのままの格好で小首を傾げるのでそれだけなら可愛い。それだけなら、ね。
俺がため息をついて、言う。
「作戦会議って、俺んち？」
「そう！」
美衣は物凄くうれしそうにビニール袋を俺の鼻先に突きつけると、
「なべを突きながら作戦会議だよ、くにひこー」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1825v/

思い出の定着

2011年9月25日03時10分発行